天竺物語

862
1

国立国会図書館　タイトル『天竺物語』 請求記号 862-1

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『天竺物語』　請求記号 862-1

ガラス使用

862
1
95

国立国会図書館　　タイトル『天竺物語』　請求記号 862-1

ガラス使用

862-1
(195)

天竺物語

播列高砂船町住吉屋天竺ニ渡リ物語

一、私十五歳の時京都角倉与市殿高祖三百の十の人家にて祖父ハ大坂前橋住之屋と申仁ニ庭と云連渡リ申ハ此前橋住之屋ハ大坂橋屋道意ニ お入仕ハ人にて其時大坂大年寄濱屋幸房大塚屋心所橋屋ニ至る世話にて住之屋ニ庭氣申ハ都ち長崎南蛮阿蘭陀ニ至る海上案内知者故ニ吟味ニ庭申ハ利ニ此市殿唐船ニ水主ニ分六十人氣申ハ水の内役者小貝物と申て帆柱梶碇ニ小船申者を持重ハ

国立国会図書館　タイトル『天竺物語』　請求記号 862-1
ガラス使用

掘れを　たいこんと云　桂へ出る者を　あたんと云
毎恍縄役を　毎こんと云　淀の役を　そこんと云
荷物積役をてつかゝと云　掃除役を　さわんと云
物書役を　かきつけと云

日本分天竺へ渡り年ハ寛永三丙寅年十月十六日
長崎福田をお船仕明年三月三日ニまかる国ニ
さ川たんていやと乗り中ハ中年一ヶ年延長仕
三年めの卯月三日ニまゝさ川の口をお船仕
八月十一日ニ長崎ハ名船仕ハ日本分新ハ
舟七さ五十二ヶ月たゞ九ヶ月船頭三百九十九人こ
皆無年ニて帰りし

一渡ハ渡り時ハ私十九歩　此時ハ十一月十四日ニ長崎
福田をお船仕明年二月十八日ニまかる国へ
乗名仕ハ又明年八月十八日ニ長崎へ帰名仕ハ

一又ニ渡渡り時ハ阿蘭陀の屋よりたとり人の
唐船にて渡りハやようすハ長崎ニ屋敷ニ建
日本ニて知行千石ニ至ル戸ニ屋敷ニ建
刈やようすゞしし町とり　ニ建　船頭ハ
ひそうと市右衛門とり長崎の者ニて出来
阿蘭陀舟ハさよ舟唐人数三百八十四人乗り

塔曷沙古（タカサコ）
刈大寛西こ

一寛永三丙寅年十月十六日日本長崎福田
が女婿男婿とも十六里まが南へ飆れかさん今
と六百四十里は西の七百四十里ほ
は西の都の口圭籠（ケイフン）と云二三十里程仲にて今
たけんと云婿二ツ是を見て日本が南へ走
りは たかさんかうが六百四十里西へ地廣東の
口天川と申和を見立りは此天川海の原
さの百の十里ほ此南へ南り大分を
小分さと云里二ツ南りは此里と日本の
里とを見立磁針を以て方角を考へ

国立国会図書館　タイトル『天竺物語』　請求記号 862-1
ガラス使用

舩ゟは天川ゟ南へ舩三百里駒鼻と云是ハ利
庵の北東南の隅の地又西へ走る三百里交趾
ぶろんゟ嶽とゟ大山ゟ行ゟ利達摩大師の
ゟ誕生の所也是ゟ南へ四百里舩占城国也
くたろうと云ゟ又南へ四百里走東埔塞
のかこんかうろとゟ是ゟ二百里南へ弛
暹羅のいも語とゟ語ゟ是ゟ八百里成亥へ
たせ摩伽陀國流沙川の口也長濱ゟ此所
まて三千八百里也
暹羅国流沙川の口ゟ三里川上へ登りたん

ホルウニトウルト云語カ

三百里カ

ていやとゟ城ゟ此所にて日本ゟ此所朱原を
段まりて国の都へ早舩にて若とゟは
相はたんていやの城主山田仁左衛門とゟ人ハ
たやむ一国の國王也日本ゟ此所朱原を玄段は
生国ハ日本にて伊勢より田の所の代发
にて白戸へ下り清水寺殺所吟味にあいま
故ゟ長濱へ大蔵飛案し暹羅国へ渡る
國王に衣抱取て軍陳に手掛て殺利国王
の舞に成後ハ国王の語をつき
たやからうんとゟ王に如くゟはよしゟは

37 カ 江 ち

国立国会図書館　タイトル『天竺物語』 請求記号 862-1
ガラス使用

からあれとハ侍大将を云也 位ハ左ん云し
とゆて左大臣のやゆは 侍を兼ハ事也
ゆは 知行何万町とゆは 王帝御番に勤
ゆ 日本分積年ハ高麗ハ かやかくかさ
扇子 ぬ里物 朝鮮の臣皇 臣ゆはまつ
かや かさ 扇子を臣ゆは 日本の紙ハ薄く
恒こさ故ゆは
天竺二分 賓年ハ物ハ 糸巻物 茶種 伽羅
藤 高木 さめ 採 賓上ゆは
此 仁者ハ日本の高人を以 柴 沐かなかしかり
結手物 詩 臣 刈山田 此 祝頼へ 此 進物採こゝつけられ

37 六 七

刈山田へ屋ゝし沐かれ恒ゆは 本に祝頼ゆ沐
掛け流 沐川 川下分 上と臣法を老人
最ゝ行 扇り 八年 ゆりかゝ里ゆ 川上
檀楊山へハいうゝ也 ゆりしゆ 鞍 奥ハ
たゝきよし ゆ 他へハ此川ハ 鯉 鮮 鯉 多く
居ゆは又 暖 西ハ あつき故 蛇も多居ゆは
あつき時分 多をあひ時 子左採ハ行ハて
簾かけ 童こそ門まで多あひゆは 自然 蛇ハ
出られ 六ていやたいの長老を 頼み 文字を
洞 もゝい川上分流し ゆはて 蛇出死して
せり上り ゆは 取をとり 穀ゆは

檀楊山と行
川上とハ知行
ゆりし

枚たんていやか二十七里川上へ登り行ゆき
だんこくとゆ城あり又先か二十里川上へ
出り こつまひさらとゆ城あり此所ハけい
ゆい山清鈴本とゆ本あり日本の空海
此本に住居して 文殊と多恵あらう
そいふあゝ所こ又二十五里川上へ出り大海（たいかい）
とゆ都なり流沙川の口か此都と七十
五里あり也大海の都か上へハ海船ハ不通
小舟ハ川上へも多くあり中ハ海船ハ不通不ゞ也

37 七 六 七

二里宛カ

ていやたいとゆ本あり此本屋敷ハ等し
須達長者の屋敷也但遅羅一国の長老王こ
枚所續七里行 釈迦堂三ツあり
長さ二十里宛の釈迦堂三ツあり
此堂とも七里の所續也
立釈迦東向 居釈迦小向 寝釈迦頭西西向也
寝釈迦の小指の厚さ三万寸あり
右立釈迦居釈迦寝釈迦三ツ共 釋迦の
御作也
堂の柱立本の多き人十五人手を引合

柱たけ若波三
百六十つら
周五百つら

十五度迴り六浙し三百一迴りはあまりを
あつきつよきは悪くハ迴り帝は　堂の
新の四ちぐ八百町三筋を刈新迦堂町
とはけ堂ハ新迦佛たに山を切ぬきる
形に作り飛ぬのうにても詩人年忌等
にも金箔を銅ふり作る形にたくを打ち
は金仏のやうにおんへはは
此三町此堂六十七里後高さ二十里
作れ摩伽陀国海上より此新迦堂
目南に舩はけ和山とはハ無くか

堂六里高カ
高二里カ

37
八
七

無に和におんへ多はは玉の奥にハ高山
多尺へはは但天竺ハ六丁を去里とはは
一都から四十二里川上に靈鷲山をこくは
岩の高さ去ちまで八丁七さ六十
丁をけ岩の高き如に佛の作座の給
を形を手洗鉢を作し都から見ら
づ山より四十二里の名三月末から四月末
まで市立はは天竺の八日市と
はハけ市の事なり
靈鷲山の如にたへはたらやうの

木の葉毎年一分已つゝあれはけたら
やうの葉にて佛は在世の時に井は説
法の書家は文字は書葉ハていやた
いの寺には書けていやたいの長老ハ和を
居るは船頭前橋徳之浦宮ハ木下六左衛
と申仕まて云書けて此六左衛門内室を
刻ていやたいの長老の妹まて云書
依て二を長老分六左衛門申家は
和一枚不可仕拵細りはと和は船寺
刻南寺十輪寺へ生物に上宝は

37 a

八ひ

此六左衛門八日出まてなるハ三百石斗
ハ申は体の也天竺にて王帝此番
居まて此書刻日出にてハ大納言
の位の也申は
一 霊鷲山分四千三里川上へ登り座
禅石と申四石を此四石の高さ三十
三丁に書に此四石浦川の中へ生て
い割り申は此四石の上にて諸仏座禅
家は左座禅石と申は此四石浦川
の中へ生てい掛りたる上に仏化の所堂

五里ニ七門に座像の釈迦仏一体あり
此座禅石ゟ二里川下へ下里こんか川
と申川東へ見かれ流れ申ハ刈此川
の下の口を東埔寨と申ハこんか川
もさ口ゟ奥ニ千二三百里程ニ
一中天竺菜花六こんの伽羅山と申て此所
ゟ伽羅を大分制じ此分るさん東埔寨
ハ也制申ハ此伽羅山へ御入ハ停止奉行名ヲ指申ハ
若此木盗ハ罪ハ行ハ申ハ
菜花六こんちつゞると申処へ八百里未
申へ乗ゆ事ハ此所ゟ藤方本伽羅

37

十

九十

制申ハ又是ゟ九百里未申へ乗ゆ事
ニ西ゟ行くと申所ニ此所ゟ渡此頼ニ
制申ハ是摩伽陀国の未申此角ニ是ゟ
南ハ南京ニ至ル事ニ成ル
ハ南りちつゝむ事ニ いきまゝ事ニ ぬい
ゟくこんにゝろ事ニ たつたん事ニ
一万里ゟ瀬と申ハ南京と東京との
堺目のちなこ此瀬のちなとひとつ
のちなとぬけ合申ハ此瀬の万十万里
ハ程て此万里ゟ瀬の末釈迦堂の口と

續き三千日高千里流中ゆゑ
珊瑚珠ハ流沙川の口こんの川の口に出来て
此分南京の都の口に大ぶ出来也中ゆゑ
摩伽陀国にも伽羅ハ中て林出来伽羅ハ
其三月に初中て於生来三月此ぶに上れ
波を去り恋愛をこんまなさんと云
其の能来を伽羅と中ゆゑ
摩伽陀国領門是あれ其を極三ゑ之あると
云所を都分ゆゑ法二千里宛さんとめまて
三千里ゆゑ波ゆゑ織物 海ゆゑ多くて

一

恒河川カウカ
珊瑚珠ハ八月十五ヶ月の光に水底へ入事中ゆゑ

高物ゆゑ此所天竺始皇にて贄国に
て日季光通車に乗り往来ゆゑ車分
落ゆゑ焼死ゆゑてみいらに如中ゆゑ
三日月分六七月とハ別 答ゆゑ出来て
往来日本分ハあつく出来て八九月より
三日月此ぶ迄ハ夏の季分格別あつ
く出来て右一日に三日変り多あひ中ゆゑ
栄ハ其年に三変ゆゑ来中ゆゑ根年ハ其三月
一変付て後二変ハひつじさくのこと云
三月六月十月三変栄ゆゑ来中ゆゑ初と

37
十一
十七

後世に為米は米ハ中米にて納りに為ハ
種首苅にして米波ならハかりまて
小してまるきのことくに仕ハ米入中
俵ハ茂延をかますに如い一かまきに
いかゝ米ハ為斗程入中ハ見らるゝつゝい
為中ハ縄にハたらをへき縄にたらい
つゝい中ハ但見らはもさ長ハ為程
二為ハ四為三為ハ三為程に為米中ハ
まるゝ国に八ヤ志をとり菓子法度
目なの大きな梨子はやゝ物にて

37 十二

十一ゟ

法度ニ一を椰(やしか)を二ツに見るゝは内に
所以合程ニ付て此水諸毒を解中ハ
目なく人にハ早くに用ひ中ハ二を波書
に米三合程入中ハ是にて長くに米
六十盃壹中ハ但長くに長ゝ八米
の積にて法度

一 白銀ハたゝぶきをもひ中ハ目なの
白銀ハ二割米引中ハ居吹銀ハ長毎
長くハ二分為重如此に如毎の小口に
極下を打重たる重ハ不可に至やる

佐藏ハ日本のてくきをひとは秤ハせしは

一 天竺の物数

一ツハこんか　二ツハ　三ツハてれす

四ツハ　五ツハ　六ツハ　せいし

七ハせいらく　八ツハ　をいで　九ツハ　のび

十ハでじ　百ハてへんてき

千ハ　万ハ　ぎん

一 倉ふ事ハ　きんかくと云　いやとハみしいとは

一 摩伽陀国ハ松ハ無くは紫檀黒檀多く

の樹木四種ハ竹ハ大分四種ハ大竹とは

ふとき　四ツハ　五ツハ　純元竹のすハ

細く　小指のふとき程かゝ無く

節の弓し　長尺　竹のす無くゆく

うす屋なとハ竹を引物ハしつかいとは

座敷なと弐二階ハ居ハ座敷の下ハ明

金とは　や祢ハ瓦ふきこけらふきに

いうしは　悪ハ茂延喜ハ牛とは　冷茂

物を用とは　本草にのられ　ぬかけとは

国立国会図書館　タイトル『天竺物語』　請求記号 862-1
ガラス使用

一人からハ日本分せい言く生まれいに
おろんへ中は男ハ耳分下をそり所に髪を
金束を切居中は南蛮風のよしじけし
姫子のやうに所結 女ハ髪を三倍金伽羅
の油用中は男にも伽羅の油ぬり中は
髪ハ庫コけに三志くり居中は髪ハ
志んぜうにおろんへ中は
一金の志田たんのこゝく如物を志し
前もくりうる所をこゝて書きあい分
後へ志せ下前表ゝ言ことくにして上に

麻かこひうこ

37 十四

十三ハ

たあと中て十結のこゝく如物を志中は
女の礼服ハかつきかゝ志し中は男ハ
男ハ腰にひつゝくと中て海道の包丁の
こゝく如腸者をさし居中は
てんくらんと中て上下たにかんむり中は
上皮ハいんすうしれよりらくをさけ
下皮ハ志んちう様月中は
熱別お家庭ハ女人通は所を三倍ハ通り
所中は男お要うを待居中は右男所へ
おてちやうと中て十念はたゞ通り中は

ちやうとハ粉迦と云事と呼へ申ハ
都て俗仁ハ日本人を見ふ事を合
ちやうと申て祥て通り申ハ雑のお
うやまい申ハ

一 粟麦稈(ひへ)云々 大豆赤小豆作事 瓜茄子ハ
不許多作事 日本の風味同事 瓜ハ一入味能ハ
白瓜ハ云々ハ茄子ハ四時ゑ云々樹木のこと
梯(いしご)をさしてゐりし

一 けゝあ牛 猿ハ云々 獅子虎象ニ手ハ獣多
居申ハ象ハ国ニ象ハ建銅申ハてゑまて

37 十五 十四ゟ

をかけ引まゐしまひ申ハ象のつゝ花
東星を見れハ云々東いへ申ハ大象ハ軍陳の
時引ならへせいらゝ組仕かけ申ハ也

一 多牛多居申ハ是を百姓日本の牛のこと
飼ひまひ入田畠をさゝき多車牛ニ用ハ

一 馬ハ日本分小ゐりにおゝへ申ハ

一 麝香犬ハ鉄炮ニて打穀ニ手低つゐニ入ゐ
ニ埋蓑(をゝ)後ニ入れ申し 賣賞仕申ハ天竺のへハ
むさゝきものとて隠ひ申ハ此麝香ニ能
似ゐるひ申ゝと申ハ右居申ハ見遣へて打

教へハ柱ハ先をひかれ死とハ
一めんぞうと申て日本の山犬のこゝ如
けたる人をあやめハ
一鶯焉所ハ鶯ハ日本とりしる焉ハ歌
たくつ作
一孔雀ハ家ニ於座ニ向ハ糞ハ人ニ毒の
よし家のかへ柱ハ風風穴を通り
へハ出まて家の内へかけ入ハ
庵七帝の名
ちやくちう　ちうちう　ちんぞう

ちんかう　かうのくふ　かんとう
なんまん
庵五帝の郡名
えんまん（さ）　かうち（左二ノ延生処）　ちやむ（又ちやんだる）
ちうちん　かうちや
天竺高船所見の人数
角倉与市　茶尤買渡　平野藤次郎
初渡り以時長崎御奉行ハ竹中宋女様ニハ

右為天竺往来仕候俄以昂ニ年無筆故
筆人ヲ通リ物語仕候
諸三浦年八十四才ニ不剃髪比
法名 宗心と申候

延享四丁卯年十月廿九日写之
新宮義珍

天竺

一 日本の長光ち如来此事咄 談ハ
如かたつ芝 [たつ子] 系統 談ハ事咄 ハ
けるなかり 申候ハ

一 稲大良小貴 何にてし長植年重こ忘し
ふ給ふ此りしせまて植年重ニ 今よくお
来ハ何こてし 賣買物ハ月つ日 談ハ

37
十七

862
1

37
十八
止

国立国会図書館　タイトル『天竺物語』 請求記号 862-1
ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『天竺物語』　請求記号 862-1

ガラス使用

862
1

国立国会図書館　　タイトル『天竺物語』　請求記号 862-1

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『天竺物語』　請求記号 862-1

ガラス使用